オピニオン

平和と戦争

「自分の国」一瞬で砕け散る

無職　杉山　とみ
（富山県　95）

植民地時代の韓国に生まれ育って24年間。ここは自分の国・日本と思い込んでおりました。

当時、私は大邱（テグ）の国民学校で教師をしていました。さんさんと降り注ぐ陽光の8月の真昼、それこそ青天の霹靂（へきれき）のような敗戦の玉音放送。植民地という幻も一瞬の間に砕け散りました。

でも私たち家族6人は、かつての教え子で中学2年になっていた韓国人少年に助けられたのです。荷物を運ぶ牛車を手配し、その後もずっと食糧の援助もしてくれたのです。日本へ引き揚げるときも、少年は学校を休み、同じ列車で大邱から釜山（プサン）まで見送ってくれました。学校で祖国の言葉を禁じられ、納得できない思いもあったはず。それなのに、敵味方に分かれるはずの少年が最後まで守ってくれた、引き揚げの釜山港。私の心の中でそれまでの人生が、まるで瓦礫（がれき）のように音を立てて崩れていった、悲痛な惨（むご）い別れでした。

「平和と戦争」。この対語の重さ、複雑さを改めて思い返しましょう。戦（いくさ）の愚かさを繰り返さない決意を皆で誓い合いたいのです。この決意を次世代の人たちへバトンタッチしていく8月でありますようにと、ひたすら祈ります。